

研究発表 第一部会（三十六号館三階三八二教室）

午前の部（近世） 十時から

徳川時代漂流記に見る朝鮮認識

立命館大学大学院 松本 智也

徳川時代、朝鮮との直接的な接触の契機は通信使来聘時、ないしは倭館を通じたものであった。かかる状況下、国家レベルにおいては、「武威」を中核とする「日本型華夷意識」を基調として、朝鮮を一段下位に認識する構造が形成されていった。儒者は、儒教文化圏を共有する者同士として、朝鮮使節と詩文唱和を交わし、こうした交流を通じて徳川時代初期には朝鮮を文化的先進国とみなしていたが、やがて朝鮮蔑視観が醸成されるようになっていった。民衆は通信使一行と直接接触することはできなかつたものの、通信使を目にする機会を通じて伝承として朝鮮観が形成されていった。民衆の朝鮮認識は屈託のないものであったが、やがては認識そのものが後退していくようになる。したがっていずれの階層においても、朝鮮を直接訪問して認識を形成するということはなかつた。

ところで、海上活動の途上、気象悪化のため本来の目的地とは異なり朝鮮に漂着した漂流民は、偶発的であるとはいえ、朝鮮に直接接触できる機会を有することとなった。では彼らは直接見聞した朝鮮をどのように認識したのだろうか。本報告では、文政二年（一八一九）に忠清道に漂着した薩摩藩士安田義方の『朝鮮漂流日記』を中心に扱う。ここには、朝鮮の役人たちとの筆談での交流、自らの朝鮮見聞について子細に記録されている。朝鮮を直接訪問することのなかつた人々にみられる認識とはどのように異なるのかを検討する。

研究発表 第一部会（三十六号館三階三八二教室）

午後の部（近世） 一時から

「人間」と「非人間」——近世庶民の世界観の側面——

東北大学大学院 ポロヴニコヴァ・エレナ

世界観は自己を中心に成り立つことが多い。それは洋の東西を問わず、見られるものである。他者は常に自己との対比で認識されるのである。またその逆に、他者に対する認識は自己認識に影響を与えるものである。自己認識と他者認識は表裏一体である。

近世庶民の世界観もこのような自己認識に基づいている。庶民の認識では、「自己」は言うまでもなく日本人庶民で、「他者」は異人（＝漂泊者・権力者や支配者・カミ・異国人や外国人など）である。庶民の間で広く流布した書物等において、他者・異人は超人間的な存在であるカミ（善と悪の両方）のように描かれている。他者は程度の差こそあれ、人間としてではなく、非人間的に思われたのである。

このように、近世庶民は他者を「非人間」と、自己を「人間」と認識していたのではないかと仮説が成り立つ。すると、「人間」と「非人間」という二つの観念は近世庶民の世界観を解明するための重要なキーワードとなる。

本発表は、近世庶民の世界観の側面として、「人間」と「非人間」に関する認識について考察することを目的とするものである。その際、文献資料・画像資料を分析しながら、「人間」とは何なのか、「非人間」とは何なのか、またこの二つの観念に基づいている認識はどのように展開されていったのか、を検討していきたい。

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午前の部（近世） 十時から

山鹿素行関連文献考

（中国）蘭州大学 中嶋 英介

我々が山鹿素行の著作に触れる際、手近にあるものは土田健次郎訳注『聖教要録・配所残筆』（講談社学術文庫 二〇〇一）の他『日本思想大系三二 山鹿素行』（岩波書店 一九七〇）などあげられるが、またまった著作集といえは廣瀬豊編『山鹿素行全集（思想篇）』（岩波書店 一九四〇）四二 以下『全集』と表記）だろう。全一五巻にもおよぶ『全集』は素行の日記や講義書『山鹿語類』、日本中華主義を論じた『中朝事実』等、その主著が網羅されており、当時行われた史料調査の結果も月報にて確認できる。『全集』出版の後、戦後を経て素行研究が進み、現在に到るまで主要文献として用いられてきたのは間違いない。

一方で『全集』は発行当時の時局を反映したせいも、数々の課題を残す。抄録の多さもその一つだが、古くは堀勇雄が指摘した『治平要録』上の朝廷批判をはじめ、恣意的な削除箇所がいくつか見られる。また、素行関連の著作は、その多くが現在人間文化研究機構国文学研究資料館（東京都立川市）に「山鹿文庫」として近年移管され、『全集』当時の書誌情報と大きく異なる現状も看過できない。

所蔵先が変更され、原典との比較検討がある程度可能となった今『全集』のみに依拠する積極的理由はない。本発表では『全集』の達成・課題点を提示しつつ、素行関連の研究を行う上での基礎的な道筋を明らかにする。

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午前の部（近世） 十時三十分から

澁川春海の土守神道について

広島大学 川和田 晶子

澁川春海は、貞享改暦後に江戸幕府天文方の役人に就任し、江戸の自宅で天文暦学を伝授した。その内容について、高弟の一人で土佐藩の谷秦山が詳細かつ豊富な記録を残しており、二人の直筆書簡を解読し、免許皆伝に至る学習過程を分析した研究論文^①を発表した。土佐藩に伝わった天文暦学は、秦山個人の力に依存したのに対して、もう一人の高弟、仙台藩の遠藤盛俊が伝えた天文暦学は、仙台藩内で厚く支持され明治初期まで続いた。

春海門下に集団で習学した唯一の例となる仙台藩学統は、春海没後に形骸化した幕府天文方を凌ぐ人材と学力を一時保持した。盛俊の弟子・入間川重恒は、澁川家に養子縁組して四代目当主を継ぎ、もう一人の弟子・戸板保佑は、その天体観測と和算の才能を見込まれ、宝暦改暦前に京都梅小路で行われた準備観測に派遣された。

重恒は澁川敬也と改名し、享保六年（一七二一）に『春海先生實記』を著して、春海の伝記を仙台藩のみに伝えた。近年の調査で、『春海先生實記』の写本に二系統あることが分かってきた。

本発表では、敬也の弟子・佐竹義根に伝わった土守神道に関する記述を主として取り上げ、土御門神道と垂加神道と関連づけながら、春海の天文神道思想を述べる。

（一）拙稿「元禄時代に於ける天文暦学伝授―澁川春海・谷秦山往復書簡の研究」『科学史研究』第三九卷二一五号、二〇〇〇年

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午前の部（近世） 十一時から

大槻平泉の「大学」解釈——『大学語脉解』写本の比較検討——

国際基督教大学大学院 阿曾 歩

本報告では、仙台藩の儒者大槻平泉の『大学語脉解』をもとに、平泉の「大学」理解について検討する。

大槻平泉（一七七三—一八五〇）は、仙台藩養賢堂の学頭として学制改革を行った人物として知られている。平泉は、磐井郡中里村（現岩手県一関市）に生まれ、志村東嶼に儒学を学んだ後、江戸に渡り、昌平黌で林述斎、柴野栗山、古賀精里の教えを受けた。諸国を遊歴し、様々な知識人との交流を経た後、仙台藩に戻って養賢堂の学頭となり、学制改革に着手、学科の増設や医学館の設置など、大規模な改革を試みた。死去するまでの約四十年間、学頭の地位にあった平泉は、仙台藩の学問を考える上で最も重要な人物の一人といえる。

平泉が行った学制改革については若干の先行研究があるものの、その背後にいかなる思想的根拠があったかという点についてはこれまで議論されてこなかった。そこで、平泉の著作『大学語脉解』に着目し、平泉の思想を探る手がかりとしたい。

『大学語脉解』とは、平泉が晩年に記した「大学」の注釈書である。平泉はその序文で「大学」を「宇宙第一の書」と述べる。それほど彼にとって「大学」は特別な書物であった。本報告では、現存する『大学語脉解』の写本数種（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、慶應義塾図書館、東京大学総合図書館等所蔵）を比較検討した上で整理し、その内容について考察する。

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午前の部（近世） 十一時三十分から

二宮尊徳による報徳思想の内実と現代的意義

東京大学大学院（研究生） 三竹 眞知子

現代社会では、人間の関係性や社会秩序の内実が欠落したまま、ミーズム（自己中心性）の氾濫で、人間同士の絆は希薄化する一方である。多様な価値観を受け容れて人間の尊厳を認め、人間を含め万物が互いに生き残り持続することを目的とする共生社会の形成には、人間の有限性を認識し、親愛の相互扶助により乗り越えていくことが必須となる。

このような共生社会形成という問題意識に大きな示唆を与えた近世思想家として、二宮尊徳（一七八七—一八五六）がいる。金次郎（幼名）の勤労少年像は、近代になると、全国津々浦々に知れ渡り、また「二宮」や「報徳」が地名や町名として用いられ、勤勉・勤労が指摘されるが、その思想の内実は、十分知られてはいない。

尊徳の報徳思想には、江戸中期において確立された活物観を背景にする儒学、また農業実践に結びつけた経世済民論としての道徳的な相互扶助と「推譲」といった在り方が含まれている。尊徳の仕法は、為政者の支援を十分得られたとはいえないが、天地また相互関係の展開でもある彼の報徳思想は、ただ抽象的な観念ではなく、実践活動として生活や倫理と結びついている。

これらは現代にあつては、世代継承という共生の徳倫理を捉え蘇らせる意味をもつのではないか。本発表では、尊徳の報徳思想の内実としての活物観・相互扶助の在り方を追ってとらえる。そしてその現代的意義をも考察したい。

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午後の部（近代）二時三十分から

時事新報社説の起草者推定

—明治二四年一〇月〜明治三二年九月—

静岡県立大学 平山 洋

明治三一年（一八九八）一〇月以降に時事新報主筆となる石河幹明が入社するまでの前石河社説群については、すでに一昨年の本学会大会で発表した。明治一五年三月から明治一八年三月までの該期間について福沢と推定できる全集未収録社説は四二編あった。昨年はそれに引き続き明治一八年四月から明治二四年九月までの社説の起草者推定を行った。該期間の全集未収録推定福沢直筆社説は一七三編であった。そこで本年はさらに明治二四年一〇月から福沢が脳卒中の発作に倒れる明治三一年九月までを扱うことにする。この期間の発刊数は二一九一号分である。

これらの社説のうち、明治版『福沢全集』に署名著作として収録されているのは、『国会の前途・国会難局の由来・治安小言・地租論』と『実業論』の合計四四日分、それに加えて大正版『福沢全集』「時事論集」に収録済みとなっているのは二二三編中七二編（二〇〇日分）、さらに加えて昭和版『続福沢全集』「時事論集」に収録済みとなっているのは一二四六編中七三三編（七五七日分）である。明治版『全集』から昭和版『続全集』までに収録されている社説は合計九〇一日分となる。また、昭和版編纂以降に見えられた自筆草稿が九編（九日分）ある。

本報告のため判定を要する社説は差し引き一二八一日分となるが、福沢以外の署名入り社説や翻訳はテキスト化しない、また連載社説は初日のみテキスト化するという原則により、実際にテキスト化したのは本年七月末現在四七一日分である。この作業は本発表要旨提出後の八月以降も続けられるので、テキスト化日数はさらに増える予定である。

本発表はテキスト化された社説を福沢語彙九〇語によって選別し、福沢が執筆した可能性の高い社説を抽出することにより、該期間の福沢の時事新報への関与の傾向性について測るのを目的とする。

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午後の部（近代）三時から

キリスト教社会主義と心身修養

日本学術振興会特別研究員 栗田 英彦

明治末、大逆事件前後に多くのキリスト教系の社会主義者たちは、心身修養に傾倒した。たとえば、木下尚江（一八九一〜一九三七）や岸本能武太（一八九六〜一九二八）が指導的立場に立った岡田式静坐法、あるいは村井知至（一八九一〜一九四四）の実践した藤田式息心調和法がよく知られている。こうした流れについてキリスト教研究では、キリスト教の「土着化」の一環として理解されてきた（マーク・R・マリンス『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』など）。また、社会主義思想史においては、社会主義者の「転向」などとして否定的な評価が与えられることが多かった。一方、心身修養の展開を思想的に検討したうえで、そこからキリスト教や社会主義との関連を問う研究はこれまでほとんど試みられてこなかった。

本発表では、まず近代日本における心身修養の思想史を素描する。それによって、その内容が単なる個人的な宗教的慰安や健康回復にとどまらず、教育・倫理・政治の領域にも及んでいたこと、そして近世後期の修養法の単純な継承ではなく、改革派宗教者の活動や欧米の倫理修養運動などの思潮から大きな刺激を受けてきたことを明らかにする。その文脈のなかに、岸本能武太や村井知至らの心身修養論を、『六合雑誌』『丁酉倫理会倫理講演集』『道』などの雑誌における論説や著作を資料として位置づけることで、近代日本の宗教思想・社会主義思想をあらたな角度から見直してみたい。

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午後の部（近代） 三時三十分から

「第三の道」へのまなざし

—ラッセル訪問をめぐる言論空間に注目し—

立命館大学大学院 張 琳

第一次世界大戦が幕を閉じて間もなく一九二〇年の十月に、梁啓超、張東蓀らいわゆる「研究系」知識人の招聘でイギリスの哲学者B・ラッセルがようやく内外の危機に面した中国大陸に訪れた。すでにロシア革命とパリ講和会議の衝撃に揺れ動いていた中国思想界にとって、ラッセルの訪中はまさしくもう一つの大きな「事件」であった。中国滞在中の約一年間で、ラッセルは各地で講演し、五四運動後の中国学界に文字通りの「ラッセルブーム」を引き起こしていた。なお一九二一年ラッセルが帰国する際、当時改造社の社長・山本実彦の招聘で日本を訪問するようになった。これも大正期日本思想界における象徴的な「事件」の一つと言えよう。当時日本のマスメディアと知識人は、このラッセルの訪問に熱いまなざしを向け、様々な議論を繰り広げた。

一方、このラッセルの露・中・日訪問についての先行研究は、ほぼ一国的に考察されてきた。中国国内では、ラッセルは近代中国に大きな影響をもたらした一人の思想家として多く取り上げられてきた。これらの論説は、基本的に中国の近代化問題をめぐって終始している。他方日本では、ラッセル研究は日本ラッセル協会によって網羅的に研究され、初期には牧野力などの研究者がおり、近年ではほとんど論理学、哲学領域に研究が集中し、近代思想的側面からの研究は、いくつかの単著を除けばほぼ見られない現状である。以上の問題関心と研究史の検討から本研究は、一九二〇年代初頭ラッセルのアジア訪問に注目し、彼の到来とともにもたらされた哲学及び政治思想が、如何に日中両国の知識人によって認識され、変容していったのかを、交錯する言論をもって検討してみたい。

研究発表 第二部会（三十六号館五階五八一教室）

午後の部（近代） 四時から

近代日本文学者と近代日蓮主義の一側面

—北原白秋と法華信仰—

日蓮正宗教学研鑽所 長倉 信祐

本年は北原白秋（本名「隆吉」一八八五「明治十八年」一月二十五日～一九四二「昭和十七年」十一月二日）の生誕一三〇年にあたり、生家（福岡県柳川市）や白秋有縁の地でその功績を称えた各種の学術講演会が開催されている。近代日本の文学界を代表する白秋の詩人、童謡作家としての卓越した才能は、今日もなお歌い継がれる多くの童謡、詩歌、校歌等から明らかだが、その活躍の陰には白秋を物心両面で支え、実業家として手腕を奮った実弟達の存在が大きい。事実、長弟の鉄雄はアルス出版、次弟の義雄はアトリエ美術社、従弟の正雄は玄光社という写真会社の創業者だった。本報告は実弟鉄雄の勸化に導かれ、白秋が宗教的回心に至り、大石寺信仰に帰依した史実を繙くため「信心」（『世界の日蓮』）という作品を中心に白秋晩年の信仰観を再考する。従来の研究者は近代日蓮主義の視点から、国柱会会員の妻を介して、白秋が田中智学と交流した事実を指摘していた。だが白秋の国柱会入会の事実はなく、詩人文学者として国酔会へ協力したに過ぎない。しかも昭和九年頃、西尾喜三郎の教化で、実弟の二人が日蓮正宗に入信し、同年三月に北原家（妻子を除き）は大石寺信仰に帰依した。その宗教的感動を白秋が詠じた作品が「信心」という詩歌だった。この思想背景と周辺を解明することが本報告の主要な目的であり、あわせて目黒妙真寺設立に尽力した長弟の信仰深化と教化親の出自（京都伏見寺田屋）にも着目し、白秋晩年の信仰観を再検討する。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午前の部（近代） 十時から

「国史学」における神道・仏教

— 『稿本国史眼』の歴史像を中心に—

ノートルダム女学院中学高等学校 池田 智文

官学アカデミズム史学・実証主義史学として成立した帝国大学系「国史学」において、史料考証や個別事象の実証の成果を「国史」として総合的に認識する際の座標軸は、基本的には「国体」論に即したものであり、その意味において、近代日本における「国史学」は、天皇制国家を歴史学の立場から補完する学知体系——「皇国史観」的歴史認識を導き出す学知——としての側面をもっていたと言える。報告者は、この点を思想的に掘り下げていくための分析視角として、日本近代史学の「宗教」認識の検証、とりわけ近代天皇制国家の思想体系の基軸となっていた国家神道体制との関係性を検証することが必要ではないかと考えており、二〇一二年度の本大会での個別報告から、辻善之助の仏教史学における歴史認識、とりわけその「神仏習合」論のイデオロギー的性格について検討し、昨年度の報告では、その全体像を考えるため、久米邦武の神道論からの概観を試みた。本年度の報告では、改めて、辻以前の「国史学」における神道・仏教・神仏習合に関する認識や歴史像について、帝国大学国史科のテキストである『稿本国史眼』（重野安繹・久米邦武・星野恒編、一八九〇年刊）を中心に検討し、国家神道体制との思想的関係について考えたい。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午前の部（近代） 十時三十分から

近代日本における中国戯曲研究

— 青木正児とその著作を中心に—

関西大学大学院 辜 承堯

近代的な学術意義を持つ中国の古典戯曲研究においては、王国維をもって嚆矢とするが、実はその著作『宋元戯曲史』（一九一二年）に先立って、森槐南をはじめとする日本学者は中国戯曲に対する関心が、明治十年前後にすでにその端倪が見つけられる。

演劇、小説のような虚構の文学を尊重する西洋の文学観念を刺激され、一部分の明治漢学者は、戯曲のような文学と正統視されない俗文学を対象にして本格的な学術研究の展開してきた。

明治期における蓄積を経て、大正期になると、東京帝大の塩谷温と京都市大の狩野直喜を代表にして、戯曲研究の基盤が一層整えていたため、支那文学研究において人気な分野になった。このような背景にして、青木正児は京都帝国大学文科大学が新設した支那文学講座に第一期生として、その戯曲研究の道筋を歩んできた。

「明以後は取るに足る無し、元曲は活文学なり、明清の曲は死文学なり」と言われた青木は、王国維の『宋元戯曲史』の後を継ごうとする意気込みで、『中国近世戯曲史』を完成したことをもって、近代日本における戯曲史ないし文学史研究に動かせない地位を獲得した。

本稿では、青木の著作集と親友の回顧を基づき、青木の中国戯曲研究の道筋を明晰的に描き出す上に、青木の戯曲関連著作を総合的に取り扱い、その戯曲研究のアプローチ、特徴、問題点及びに戯曲翻訳における特色などを明らかにしたい。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午前の部（近代） 十一時から

日本「内地」におけるモンゴル語教育と植民地主義

愛知県立大学大学院 朝克卒力格

日本でモンゴル語教育が始まったのは、一九〇八年（明治四十一年）に東京外国語学校に東洋語速成科が設置されて以来である。東洋語速成科ではマライ語、ヒンドスタニー語、タミル語、蒙古語の四外国語を教える事になった。前者の三つの言語教育が日本の南洋進出論につながるものとしたら、モンゴル語教育は大陸進出とつながるものであった。日露戦争に勝利した日本は、朝鮮半島や「南満洲」を勢力下に置いたが、「北満洲」は依然としてロシアの勢力下に置かれていた。さらにロシアは、近接する内モンゴルに勢力を拡大しようとし、「北満洲」や内モンゴルは、日本とロシアが勢力を争う「課題」として存在していた。こうした歴史的経緯のもとで、日本「内地」でモンゴル語教育が始められるのである。

近年「満洲国」のモンゴル語教育に関する研究が進んでいる。多くは教育による民族の近代化に視点を据えた研究であるが、日本植民者による植民地政策の視点からの研究も現れている。しかしこれらの研究は「満洲国」を対象としており、日本「内地」におけるモンゴル語教育にはほとんど触れていない。「内地」におけるモンゴル語教育は日露戦争以降の大陸進出論のもとで始まった。本報告では、日本「内地」におけるモンゴル語教育が、当初から大陸侵略思想と深く関わる植民政策の一環であったことを明らかにしたい。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午前の部（近代） 十一時三十分から

戦前・戦中期日本のアジア社会論における〈アジア的なもの〉

— 概念の形成と意味の変遷 —

大阪大学大学院 周 雨霏

地理上の概念としての「アジア」は古い来歴を持つが、社会の特定のあり方を指す術語として「アジア的」という言葉が用いられるようになったのは、それほど古いことではない。具体的にいうと、社会科学上の術語として「アジア的」という言葉が前景化してきたのは、一九二〇年代後半にソ連、日本、中国で盛り上がったアジア的生産様式論争においてであり、その後この術語は意味内容を変化させながら日本のアジア認識のなかで重要な役割を果たした。

本報告は、一九二〇年代後半から終戦に至るまでの日本において、「アジア的」という術語が用いられ始めその意味が転回していったプロセスを描き出す。そのプロセスは、次の三段階に分けられる。「アジア的」という術語は、(一)三〇年代初頭までは、「封建的」の対置概念として、中国社会の構造的停滞を指す言葉として用いられた（橘樸など）。ついで、(二)三〇年代中頃にかけて、講座派系の論者が、アジアにおける封建制の停滞性、とくに日本の後進性を指摘する言葉として、この術語を用いた（羽仁五郎など）。そして、(三)戦時期に至ると、この術語の否定的含意が反転されて、東洋諸国の灌漑農業を土台とする共同体のイメージと結合され、「大東亜共栄圏」の基盤となるべきものとされた（平野義太郎、森谷克己など）。

本報告では、戦前・戦中期において日本とアジア諸国との関係が再編成されていった過程を、「アジア的」という術語の言説史を分析する作業を通じて論じてみたい。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午後の部（近代） 一時から

『耶蘇教審判』にみる本田親徳の天帝観

国際基督教大学大学院 並木 英子

一八八七年（明治二十年）、海老屋専売店刊、『耶蘇教審判』の著者、本田瑞園は、またの名を本田親徳（一八二二年～一八八九年）（文政五年～明治二十二年）といい、鎮魂法・帰神術を实践した靈的神道家である。

本田親徳の著作としては、親徳の弟子の一人であった鈴木広道の家に伝わる諸文献からなる『本田親徳全集』（鈴木重道編、山雅書房、一九七六年）が存在するが、『耶蘇教審判』は親徳の生前に刊行された唯一の著作であり、親徳の神道思想を理解する上でも注目に値する。

『耶蘇教審判』は明治十年代をピークとした反耶蘇運動の中で記された反キリスト教思想を根底とした戯作書である。本書の中で親徳は、キリストの子分が日本において「牽強付会の説」をもって愚人を徒党とし、金銭だけではなく、日本国土をもせしめようと企んでいるという。また、明治二十三年の国会成立時には、仏教、儒教の二道を排し、国教化を目指していると主張する。

そのため親徳は、本書において、新舊両訳聖書の批判的注釈をおこなう、キリスト教の基本信条である「マリアの処女懐胎」「神の一人子イエス・キリスト」「贖罪」「天地創造」などを取り上げ、茶化しつつ、聖書世界の解体を試みようとしている。

本発表においては、特に「天地創造」と「人間の樂園からの追放」に対する親徳の思索を取り上げ、親徳の天帝観とそれに伴う人間の心身論について考察をおこなう。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午後の部（近代） 一時三十分から

戦後思想における内村鑑三——福澤諭吉との比較論をめぐって

日本学術振興会特別研究員 柴田 真希都

内村鑑三は日本思想史や文学史において、今では福澤諭吉や中江兆民、徳富蘇峰や幸徳秋水といった明治期の大立者と並び称される存在となった感がある。それはアジア・太平洋戦争後、家永三郎や丸山眞男ほか、当代の学者・知識人たちが、内村を彼らと比較しつつ論じたことと無縁ではない。彼らは内村において原理的なものを発見し、それが普遍的であったり超越的であったりするがゆえに、近代日本の時代精神と鋭く切り結んだことを重視した。論者によっては、内村の聖書福音への立脚の姿勢それ自体に新しい人間像の可能性を見いだした。

家永は戦後『内村鑑三著作集』発刊によせた言葉において、日本思想史における内村の意義を求めて、内村を福澤との比較の相のもとに論じることを提唱した。家永と同じく、福澤研究者の丸山もこの比較の選択を定着させるのに貢献している（筑摩書房『現代日本文学全集』五一巻で福澤、内村、岡倉天心を比較している解説は『忠誠と反逆』にも収録され、流布している）。また比較文学者の氷上英廣も、『内村鑑三著作集』の月報にて、対話という文学形式により福澤と内村の個性を比較し、内村の思想史における意義を独自に抽出した（一九五三年）。このように戦後、内村を論じるにあたり、その比較対象として、筆頭に挙げられてきたのが福澤であったことに注目する視座から、戦後思想において内村鑑三のもった意味を探求することが本報告の目的となる。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午後の部（近代）二時から

明治日本における足尾鉍毒事件の思想像

— 島田三郎と陸羯南を中心として

東京大学大学院 商 兆琦

本研究は、鉍毒事件をめぐる明治知識人の意見の対立、衝突及び交錯という歴史場面のコンテクストを「再構築する」ことを通じて、彼らの見解の共通性とその理念の相違性を明らかにし、彼らの思想世界に横わたる根本的な動機を比較分析し、それぞれの思想像を解剖する作業を試み、均衡の取れた理解を目指す。今回の発表は、島田三郎と陸羯南を取り上げて、それぞれの思想像を理解することを試みる。

鉍毒事件の発生を機に、島田と陸はいずれも藩閥政府が主導した文明開化の皮相と欠陥を批判し、それは「上層社会」の文明化に過ぎないと論じ、「下層社会」の改革の必要性を盛んに唱えた。つまり、人民の勢力の発達がなければ、社会的な規模の文明化の達成は、決して望むべきことではない。ただ、陸において、人民は「国民」を意味するが、島田において、人民は「平民」を意味した。二人とも、「社会契約の国家観」を批判し「有機社会」の立場に立って、「人情」や「道徳」を強調し、道徳が腐敗した社会においては、「本当の自由」がどうしても実現されないということを力説していた。ところが、島田は、その「多数者の多福を計らんとす」という功利主義を一貫して提唱し、「社会改良」の路線及び「中正」の立場に固執した。陸は、福沢流の功利主義の限界を鋭く見詰め、「各人の能力の発達」、「国家の統一」および「社会の博愛」という文明政治を目指して「国家社会主義」を唱えていた。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午後の部（近代）二時三十分から

大逆事件と陽明学 — 森鷗外と井上哲次郎をめぐる —

総合研究大学院大学 山村 奨

大逆事件は当時、多くの知識人たちに衝撃を与えた。本発表ではその中でも、陽明学との関連という点から、対照的な二人の人物を取り上げる。

一人は、森鷗外である。鷗外は大逆事件について直接、言及してはいないが、その作品にいくつか関連性が、認められている。今回は特に、大塩の乱を描いた『大塩平八郎』（一九一四年）に着目する。先行研究でも『大塩平八郎』が、大逆事件に触発されて書かれたことが、指摘されてきた。それによれば、鷗外は大逆という謀反には否定的で、その意識を作品に反映させているという。

また『大塩平八郎』に、陽明学との関連性を見る研究もある。同作品に、鷗外の大逆事件への見解と、陽明学観が投影されているとしたら、更に鷗外における、大逆事件と陽明学の関係性を読み解くこともできる。そうした観点から読むと鷗外の、陽明学の思想は謀反と関連しない、という意識が浮かび上がる。

そこで比較対象として、井上哲次郎の名が挙げられる。井上は鷗外と知己の間柄であるが、大逆事件と陽明学の思想に関連があるという演説を行った。井上もまた、陽明学者としての大塩を顕彰しつつ、その行為は批判したのであるが、陽明学と社会主義が通底し、謀反につながるとみなしていた。

両者は共に社会主義に否定的であったが、井上はそのために陽明学に距離を取り、鷗外は作品で事実上、陽明学を擁護した。また、そのような立場が、陽明学をめぐる論調の主流でもあった。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午後の部（近代）三時から

雑誌『道德教育』における「国学」思想

—友枝高彦・亘理章二郎・萩原拡を中心に—

宇都宮大学 水野 雄司

全国の公立の小中学校で、今年度から暫定的に始められている、いわゆる道德の「教科化」は、賛否両論を巻き起こしている。反対派は、検定教科書が導入されることもあり、「国定の価値」の押し付けと捉えている。一方で肯定派には、戦前の修身、そして教育勅語までも射程に入れ、伝統文化に裏打ちされた「日本の心」を取り戻すと息巻いているものも出てきている。

思想家としては、この問題をどのように捉えるべきなのだろうか。そこで今回は、昭和七年から昭和一三年まで刊行された月刊誌『道德教育』に表れる「国学」思想を検討したい。旧東京文理科大学及び旧東京高等師範学校における倫理学関係の諸先生をメンバーとする道德教育協会（会長 嘉納治五郎）による本誌は、「従来の道德教育は、十分にその効果を挙げたかというに、そうは思われない」（嘉納）という当時の修身教育に対しての問題意識から発刊されたものである。

国民精神文化研究所の設置、国体明徴運動、そして『国体の本義』の刊行といった、経済不況、社会不安が深刻化される中で戦時体制が強化されつつあった時期に、ちょうど重なり合って刊行された『道德教育』。ここで展開された思想を、明治以降の「国学」受容史の中に位置づけることによって、その特徴を明らかに、今につづく「道德教育」の問題を考える縁にしたいたいというのが本発表の目的である。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午後の部（近代）三時三十分から

寛克彦の天皇観・皇族観について

総合研究大学院大学 西田 彰一

寛克彦は、東京帝国大学法学部教授でありながら宗教的神道である「神ながらの道」を提唱した人物である。近年山口輝臣や原武史、中道豪一の研究により、寛克彦と皇族の関係に注目が集まっている。だがその一方で、皇族との交流をとおして、寛が天皇や皇族にどのような役割を求めたのかについてはまだ研究がない。そこで、本報告ではこれを明らかにしたいと思う。

寛克彦は一九二三年に秩父宮、翌一九二四年に貞明皇后への御進講を行ったことで皇族と交流を深め、皇后への御進講の記録である『神ながらの道』（一九二六年）を、皇后の後押しもあって内務省神社局から出版するに至った。また、宮中においては、貞明皇后の女官たちが日本体操（やまとばたらき）という寛が考案した体操を実践している（『神あそびやまとばたらき』一九二四年）。このように皇族との関係が深まるなか、寛は一九三五年の教学刷新運動において、『教学刷新施設に関する私案稿』（一九三六年）というパンフレットを教学刷新委員会に提出している。実現こそしなかったものの、寛はこのパンフレットで、国の祭祀の中枢に皇族を置くなど非常に興味深い主張をしている。そこで、本報告ではこれら『神ながらの道』や『教学刷新施設に関する私案稿』等の分析を通して、寛が天皇や皇族に何を期待したのか、また寛自身は天皇や皇族のためにどのような貢献を果そうとしていたのかについて、解き明かしたい。

研究発表 第三部会（三十六号館五階五八二教室）

午後の部（近代） 四時から

一九三〇年代における帝国飛行協会の航空思想

— 四王天延孝・井上四郎を中心に —

名古屋大学大学院 大山 僚介

一九一三年に成立した帝国飛行協会（以下、協会と略記）は、戦前最大の民間航空団体であり、航空関係者の後援や、航空思想の普及として機関誌の発行や講演会等を行っていた。私は、「航空機への憧れや文化的イメージは、航空機を持つ軍隊の受容・支持や軍隊観の変化に関わるのではないか」という問題関心から、当時の航空イメージや航空思想を探るために、協会の活動・言説の分析を行ってきた。

本報告では、一九三〇年代の協会の航空思想を分析する。特に、四王天延孝陸軍中将与井上四郎海軍少将に注目したい。協会にとって一九三〇年代は、太平洋横断飛行計画（一九二七〜二八）の失敗により衰退していた会勢が回復していった時期として、また、総力戦が強く意識される中で、一九四〇年に「国防ノ完成ニ寄与スル」ことを目的とする大本飛行協会に改組されるまでの過渡期として、重要な時期であった。この時期に総務理事を務めたのが四王天であり、協会立て直しのために積極的に航空思想の普及を行った。そして、この時期の協会の航空思想を理論づけたのが、協会囑託の井上であり、彼は航空発展の必要性を「東洋文明」と「西洋文明」の対抗の歴史と結びつけて論じる等、独自の言説を展開した。

よって本報告では、①一九三〇年代の協会の活動と四王天の役割、②協会が発行した冊子や井上著『世界は動く 皇国日本の使命』等の内容を分析し、その特徴や航空思想の変遷を明らかにしたい。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午前の部（中世） 十時から

法然の「念仏」について

学習院大学 島田 健太郎

本発表では、法然の「念仏」について私見を述べてみたい。その考察の前提として、まず聖道門と浄土門の二門分別を取り上げ、両者の関係について私の理解した所を提示する。そしてそれを踏まえて、法然の浄土門の「念仏」について、他の念仏行とどこが違うのかという点を中心に考察したい。その際私が問題にしたいことは以下の二点である。

一つは「三心」と「念仏」の関係である。これは従来あまり注目されず、かつ積極的に評価されていない問題であるが、『選択集』で法然はこの三心の問題にかなりの分量を費やしているし、『一枚起請文』でも三心四修は南無阿弥陀仏のうちに込められると述べている。三心の「こもった」「念仏」とはどういうことか。「心」の観点から考える余地はないのか、検討してみたい。

二つには、法然の言う「念仏」は、果たして「行」なのかどうかという点である。「行」であるなら、法然以前の念仏者達とどう違うのか、「行」でないなら、では何なのか。これは煩悩の問題や通説で言われる「易行性」の問題とも関連し、法然だけでなくより広い視野に立った検討が必要であるが、この問題に関する私の考えの一端を述べてみたい。

そしてこれらの検討を通して、その当時における法然の思想の意義と鎌倉仏教を「全体として」考える一つの視点を提示できればと考えている。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午前の部（中世） 十時三十分から

南北朝期の学問空間 — 慈遍の思想にみる —

学習院大学 林 東洋

本発表では、南北朝期を中心に活動した天台僧・慈遍の思想が成立した背景について考察する。所期の目的を達するために、彼の著作として現存する『旧事本紀玄義』（以下『玄義』）、『天地神祇審鎮要記』、『豊葦原神風和記』（以下『和記』）、『密法相承審論要抄』等が、どのような文献を参照・引用して著されたのかを確認していくという方法を採用。『玄義』はその表題からも理解されるように、『先代旧事本紀』（以下『旧事紀』）に込められた深意を明らかにすることを企図して書かれたものであるが、その『旧事紀』解釈はいわゆる伊勢神道・両部神道の書籍を広く援用したものである。また『和記』には、各章ごとに「要文」と称する参考文献からの引用が付されており、そこから同書が『豊受皇太神宮御鎮座本紀』、『造伊勢二所太神宮宝基本記』、『倭姫命世紀』、『太宗秘府』、『宝基文図』、『神皇実録』、『神皇系図』、『天口事書』等を参照しながら著されたことが知られる。『旧事紀』『古事記』『日本書紀』に伝えられる神話の変容を遂げ、新しい神話が生み出されていた時代にあつて、慈遍は先行する各文献をどのように理解し、援引していたのか。それを読み解くなかで、彼の著作の前提となる知識体系や、彼が生きた時代の学問環境について検討していく。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午前の部（中世） 十一時から

孟子受容史論への批判的な考察

— 『神皇正統紀』をめぐって —

河南大学 邱 璐

今回の発表は一昨年、昨年の発表の続きである。一昨年、中世以前の文献を検討し、昨年、主に中世初頭の禅僧語録を中心に調べ、まとめたのである。『神皇正統紀』と宋学及び孟子の関係はよく議論される問題だけど、避けて通れない課題だから、取り上げて検討してみようと思う。北畠親房が生きる時代は宋学が日本に入り始めた時代である。だから、この時期の宋学の影響を議論しようとするれば、どうしても難しい問題にならざるをえない。宋学と関係がありそうな言葉は文献上見え始めるが、出典は果たして宋学の文献か、作者はどれだけの理解を持っていたのかなどは、さまざまなややこしい問題に直面しなければならぬ。

戦前、宋学は建武新政に思想的な支えを提供するというように解釈されたが、戦後、ほぼ否定された。従って北畠親房は宋学から大きな影響を受けたという考え方もなくなった。しかし、『神皇正統紀』における儒教及び宋学の影響という問題は残っている。この問題を巡って、さまざまな角度から、いろんな議論がなされる。

今回の発表は、『神皇正統紀』の中に、すでに先学によって指摘されたところ—宋学及び孟子の影響であるところと、そうでないところ、をもう一回検討してみるものである。何かの新しい論を提出するのではなく、もっと正確に上述の問題を把握するための小さな試みである。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午前の部（中世） 十一時三十分から

浄土僧と夢—日本中世における事例から—

早稲田大学日本宗教文化研究所 鈴木 英之

日本中世における夢の重要性は言うまでもない。明恵や叡尊、親鸞、頼瑜など、さまざまな高僧たちが夢を重視し、その内容に大きな影響を受けてきた。それは浄土宗においても同様で、法然が善導との夢中での対面を果たしたという、いわゆる二祖対面のエピソードは良く知られている。しかし、その一方であまり着目されていないのが、それ以降の浄土僧と夢との関わりである。法然より後の浄土僧の書物には、夢に善導や法然ら偉大な祖師の化現を得て、自らの法門の正統性を確信したり、夢告にしたがって書物を記したりする事例が認められる。こうした夢の類型は室町末期に至るまで散見され、夢は、中世の浄土宗を語るうえで外すことのできない重要な要素であったと考えられる。だが、中世の浄土宗における夢の研究は、玉山成元氏の論考（「中世浄土教団と夢」『日本仏教史学』一六、一九八二・二）以外には、管見の限りほとんど見出せず、十分な検討がなされているとは言いがたい。そこで本発表では、中世における用例を中心に取りあげ、浄土宗における夢の類型を確認した上で、その特色と意義について考察したい。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世） 一時から

伊藤仁斎における「悪」の認識について

東北大学大学院 宣 芝秀

伊藤仁斎（一六二七〜一七〇五）における善悪の認識についての探求は、これまで主にその「性善説」解釈との連関から行われてきた。仁斎は「四端の心」をもたない存在としての「悪」を提示するが、この例外的な生来の悪の存在は、当時の朱子学的な性善説から大きく逸脱するものである。この意味では、仁斎の「悪」の認識に、なにかしらの思想的問題が含まれていることは、これまでまったく注目されなかったのではない。しかし、従来の研究では、いずれもその「悪」をあくまで例外的なものとしてのみ把握してきた嫌いがあり、仁斎の「悪」の認識に含まれる思想的、また思想的意義について、正面から説明することは十分に行われてきたとはいえない。

本発表ではまず、仁斎における「悪」の理解の用例を総体的に確認し、次に「悪」と「過」の違いを仁斎が強調していることへの注目から出発して、「悪」の認識に含まれた思想的意義を解明し、それを仁斎学全体の中に整合的に位置づけることを試みる。最後に、こうした仁斎の「悪」の認識が、仁斎の個人的思考のみから発したものと見るのではなく、近世日本で活発に展開された、いわゆる「湯武論」、特に山崎闇斎（一六一八〜一六八二）の説への批判を強く意識したものであったという思想的意義について、問題提起したい。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世） 一時三十分から

浅見綱斎の「義」の再検討

明治大学 清水 則夫

本稿では浅見綱斎の「義」を再検討する。「国体観念の先覚者」といった類の、崎門に対する通説的理解の背景は、華夷論や主従関係論などの「義」に関連する問題群に集約される。これを再検討することで、通説を修正し、かつその思想的意義を再考したい。

まず、華夷論における所謂「華夷内外の弁」は、綱斎においては朱子学という原理にもとづく思想的要請と位置付けられ、何らかの現実的裏付けを必要とせず、したがって皇統の連続への評価とも論理的に連続しない、特異なものであったことを論じる。

ついでこうした原理への忠誠が、主従関係論にもたらす複雑な様相を明らかにする。通説では、「君臣の大義」は絶対的服従の論理で、献身の道徳に類するとみなされ、『葉隠』との類似や武士的傾向、日本主義への連続などが指摘される。しかし実際にはそれは、武士階層の忠誠行動における原理の欠如を批判する論理であり、志向するところはむしろ士道論に近い。しかし原理への忠誠であることが原因で、天皇や皇帝に対する批判精神は著しく損なわれ、同時に儒教本来の徳治主義はほとんど失われる。しかし、天皇や皇帝自身が「大義」に反するとみなされる場合のみ、綱斎の主従関係論は双務契約的色彩を帯びる。

最後に以上の考察をまとめ、綱斎の「義」が原理への忠誠のあらわれである一方、その内部に国や主君への忠誠を含む、入れ子構造であったことをふまえ、その思想的意義を検討する。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世）二時から

本多利明の蝦夷地開発政策論

関東学院大学 宮田 純

市井の算学者として知られる本多利明（一七四三～一八二二）は、『西域物語』（一七九八年成立）や『経世秘策』（同）の内容に顕著な国内開発論・対外交渉論を提起した人物である。これらの起案には蝦夷地開発論が内包されており、同地への関心が利明の思惟構造の一環を組成していた点を示唆している。この理解との関連下に利明の事績を整理すれば、主体的あるいは補助的な関与の差はあるものの、蝦夷地やその以北についての見解を記した成果の存在が認められ、その成立時期は、天明～寛政期に集約化されていることがわかる。

この特徴は、蝦夷地内部の統制問題やロシアの南下問題が国政課題に上がった時勢的局面との関連下において再検討されるべきであり、その延長線上には、本多利明の蝦夷地開発政策論を体系的に捉えた理解がある。その場合に、この主題に関連する事績の成立時期・成立事情・特徴的内容を網羅的に整理し直しながら、内容面の変質過程の明瞭化が求められる。具体的には、天明年間に成立した①『大日本の属嶋北蝦夷の風土艸稿』・②『別本赤蝦夷風説考』・③『赤蝦夷風説考』（第Ⅰ期）、寛政年間初期に成立した④『蝦夷拾遺』・⑤『蝦夷国風俗人情之沙汰』の「序文」・⑥『赤夷動静』・⑦『利明上書』（第Ⅱ期）、同年間後期に成立した⑧『蝦夷乃道知辺』（Ⅲ期）、といった三段階の時期区分に基づいた検討に抛りながら、日本思想上の特質としての開発思想の意義が提示されることとなる。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世）二時三十分から

江戸後期林家の位置——蘭学書・国学書の検閲をめぐる——

岩手大学 中村 安宏

天保十三年（一八四二）六月、天保改革で株仲間が解散したのこともない、これまで書物屋問屋仲間による自主規制方式で行われていた検閲が、幕府（主として林家・学問所）による直接統制方式へと変化する。これについて従来の研究では、直接統制イコール統制強化、様々な学問への統制と説かれてきたが、実態はどうであったのか。

検閲に当たった林家・学問所は、①幕府に仕える者としての立場（取り締まりに当たる）のほかに、②広く学術界に身を置く者としての立場（著者および読者としての視座）と、③儒者としての立場を併有していた。まず蘭学関係書について改革以前の大学頭林述斎は、本来は蘭学嫌忌の立場でありながら③、教化以外ならばよいという幕府の方針を汲み①、出版を許可した。新制度下で町奉行鳥居忠耀も父の①③の態度を受け、結局は読者が自主的に取捨選択すべきであると言う②。つぎに国学関係書について改革以前の述斎は宣長や篤胤を危険視していたものの③、すでに学派が形成されているという認識から、今更篤胤の著作を絶版にすることの不可を論じ①、結局は読者の選択に託す②。新制度下の林培齋においても神道説の統制を望みながら③、「一派之道」を立てたうえは統制は難しいとして①、この種の著作の検閲から手を引いていく。以上から見るに、天保改革の文教政策の柱としての検閲は、従来のようにはとらえられない。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世） 三時から

会沢正志斎の国学観

早稲田大学大学院 蔣 建偉

安政五（一八五八）年から万延元（一八六〇）年にかけては、水戸藩の学者、会沢正志斎（一七八二〜一八六三）の平坦とは云い難い生涯のなかでも、甚だ苛酷な一時期であった。安政五年六月の日米修好通商条約の無勅調印と、これに憤慨した水戸前藩主徳川斉昭の井伊直弼に対する直言は、同年七月の斉昭の謹慎に始まり、八月の戊午の密勅降下、翌年九月の安政の大獄、さらに明けて安政七年に発生した水戸浪士らによる桜田門外の変と、水戸藩のみならず江戸幕府を揺るがす問題へと発展した。水戸藩の宿儒たる正志斎もまた多忙を極めた。彼はこの難局を如何に乗り切るかを考え抜き、数々の意見具申を行なっている。しかし、一方でこの時期に彼は『読直毘霊』（安政五年）、『読葛花』（安政六年）など本居宣長および国学をめぐる著述を精力的に執筆していたのである。

彼はこれ以前、『退食間話』（天保十三年）、『下学邇言』（弘化四年起稿）、『泮林好音』（嘉永元年）などでも国学に言及しているが、その集大成ともいえる宣長批判が彼の晩年のこの時期に行なわれたことは注目に値しよう。

正志斎は様々な学問の「斯道」にかなう側面には包摂的だったが、批判すべきは批判する是々非々の態度をとっている。これは国学に対しても同様である。本発表では正志斎の国学観と「斯道」への認識を検討し、その思想構造を明らかにしたい。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世） 三時三十分から

佐久間象山における「敬」——西洋文化受容との関連から——

九州大学大学院 韓 淑婷

佐久間象山の「東洋道徳 西洋芸術」論に関する研究は、象山がいか

に朱子学を基盤に西洋文化を受け入れたのかをめぐって二つの立場に分かれている。一つは、象山が朱子学の「格物窮理」を再解釈することによって西洋文化受容の根拠を得、西洋文化を受け入れることを通して「物理」と「倫理」との「理」の両側面が実質的に分離していったという朱子学解体説というべきものである（丸山真男氏・植手通有氏ら）。もう一つは、象山が朱子学を維持した上で「格物窮理」を最大限に活用することを通して西洋文化受容ができたとする朱子学維持説である（栗原孝氏ら）。前者が、象山における朱子学を近代的方向へ解釈しようとするものであり、後者は、朱子学本来の機能を重視することにより象山の「洋学受容」において近代の比重を減殺するものであったが、両者とも「格物窮理」だけに注目し、それと表裏一体の「敬」を看過している。また、象山がどのように西洋文化を受容できたのかに検討の重点を置き、象山が西洋文化を受け入れた後、朱子学が捨象されずに西洋の自然科学原理と対立または共存することに対する検討は不十分なままである。

本報告では象山の朱子学における「敬」という要素に注目し、象山が西洋文化を受け入れた後、いかに朱子学と西洋の科学原理との対立を処理しようとしたのかを検討し、「敬」が象山の西洋文化受容にどのような役割を果たしたのかを考察することとしたい。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世） 四時から

長野義言の宇宙観

佐賀大学地域学歴史文化研究センター 三ツ松 誠

井伊直弼の側近として安政の大獄を推進した長野義言は、同時に直弼の和歌の師として知られる国学者でもあった。しかし国学者としての彼の思想の分析には、その著作の多さにも関わらず、量的に見て乏しいものがある。だが丁寧な彼と井伊直弼の国学研究をめぐる史料を紐解いてみると、極めて興味深いものがあるのも確かであり、これを明らかにしていく必要があるだろう。そこで本報告では、本居宣長や服部中庸、平田篤胤といった国学者を参照しながら義言が直弼に開示した独自の宇宙論を紹介したい。義言の政治的行動と国学者としての思想とを関連付けた分析として今なお参照すべき渡辺浩「『道』と『雅び』」も、義言について、宇宙論的思弁を欠いた歌学派国学者として位置付けている。しかし義言が、西洋天文学を日本神話解釈に付会した篤胤ら「三大考」派の議論を批判しながらも、本居大平が無用の長物とみなした国学的宇宙論の土俵に踏み込んで議論をしている点は、否定できない事実である。しかもその議論は、直弼の国学学習と深く結びついたもので、彦根藩士達に広められた形跡があり、直弼の主体形成、あるいは彦根藩家中への影響関係も考えられる。義言独自のコスモロジーを、国学史・幕末史の中に定置するための準備作業を試みたい、と考える次第である。

研究発表 第四部会（三十六号館六階六八一教室）

午後の部（近世） 四時三十分から

幕末と中国清末——『託古改制』からみた比較思想史

石津 達也

私は今年六月十二日に、西欧諸国の軍事的脅威にさらされた日中両国における、対応する「経世意識を以て思想家」、すなわち、時系列的に佐久間象山（一八一―一六四）と馮桂芬（一八〇九―一七四）|| 日中の「洋務派」、と明治維新を導いた思想の多くを編み出した横井小楠（一八〇九―一六九）と中国で明治維新に範をとった戊戌の変法（一八九八）を発動せしめた改革思想家・康有為（一八五八―一九二七）と、日中の「変法派」、両国の「革命派」と比定でき得る吉田松陰（一八三〇―一五九）と章炳麟（一八六九―一九三六）を「託古改制」をキーワードにして発表題目と同じ、「幕末と中国清末——『託古改制』からみた比較思想史」（東洋出版）を上梓しました。

「託古改制」とは上述の康有為の使用した用語を新たに、「ある国家、社会において圧倒的に優越する文化、伝統的権威を有する国家、社会において、革新的な思想・政策を発表・施行する際に、その思想・政策が伝統的権威・文化に「より忠実」との外観を意識的に、また無意識的に呈すること」と定義し直したものです。

これを学問上の普通名詞として「伝統的権威への対応の差異」を論ずることにより以上の三組六人を検討いたします。

上記の三組六人の大思想家たちは、儒教を中心とする伝統的権威（|| 古）に対する姿勢が大きく異なることが明らかになると考えられます。

とかく「儒教文化圏」「漢字文化圏」と概括されがちな両国の朱子学等の伝統的権威の差・重みを浮き上がらせ、東アジア（朝鮮・琉球・ベトナムを含む）の将来の展望に資する発表を行いたいと存じます。